市民と創造する演劇

甘い丘

2021
3/6 SAT 土・7 日 SUN

報告書

A M A I O K A
2021.3.6-7

◆作・演出――桑原裕子
穂の国とよはし芸術劇場
芸術文化プロデューサー
KAKUTA

◆舞台美術――田中敏恵
◆照明――杉本公亮
◆照明操作――丸山武彦
◆音響――島貫聡
◆衣装――富永美夏
◆舞台監督――安田美知子
◆演出部――網倉直樹
埋橋真理
細村雄志◎
◆演出助手――和田沙緒理
◆演出補――森崎健康◎
吉田紗也美◎
◆大道具製作――泉真
三井優子
◆技術監督――高瀬洋★
◆小道具製作――片桐健★
鈴木昌明★
◆記録写真――伊藤華織
◆宣伝美術――共田慎性※
中川裕樹※
※〔㈱エクスラージ〕
◆記録撮影――田中博之
◆ドキュメンタリー映像――山田晋平
齊藤詩織
◆制作――矢作勝義★
大橋玲★
伴朱音★
◆票券――長坂奈保美★
★〔穂の国とよはし芸術劇場〕
◆制作助手――佐和ぐりこ〔オレンヂスタ〕
◆協力――KAKUTA
『今さら』劇団部
オレンヂスタ
株式会社森田屋
劇団第五会議室
東雲座カンパニー
東宝芸能(株)
豊橋市役所
環境部収集業務課
〔東部環境センター〕
美容室ポッケチセ
異儀田夏葉◎
下司尚美〔泥棒対策ライト〕
成清正紀◎
〔KAKUTA〕
◎〔KAKUTA〕
新田恵

◆企画制作――穂の国とよはし芸術劇場PLAT
◆主催――豊橋市、
公益財団法人豊橋文化振興財団
◆助成――一般財団法人地域創造
令和2年度文化庁 文化芸術創造拠点形成事業

文化庁

PLAT
穂の国とよはし芸術劇場
TOYOHASHI ARTS THEATRE

「劇団 甘い丘」

［穂の国とよはし芸術劇場 芸術文化アドバイザー・KAKUTA主宰］

作・演出 **桑原裕子**

思えば若手劇団のような日々だったかも知れない。

その日々はある意味、最初から意図して狙ったものであり、また同時に、どこにも出かけられず飲みにも行けず、集まったら演劇をするより他にないというコロナ禍が生み出してしまった時間でもある。けれどともかく私とキャストたちは、マスクの向こうがどんな顔なのかほとんど知らないまま、ひたすらに演劇を通じてお互いと向き合った。

まだコロナ禍が訪れる前、『甘い丘』という作品を上演することが決まって、私は出演者募集の告知に以下のような挨拶を添えた。

「せっかくならば濃い時間を過ごしましょう。みんなでわいわい楽しもう、などという生やさしいものではなく、本気で、汗みどろで、どっぷり演劇と向き合い、誰にも代わることができないものを共に作りましょう」

この文章は、私という人物を知ってもらう上で、厳しいけど覚悟してねという「かまし」であり、「割と恥ずかしげもなく熱いことを言いますけど、それでも引かない強者求む」というメッセージでもあった。これを読んで応募してきたからには、たとえ過酷な稽古でも弱音は吐かせないぜという、ちょっとした宣戦布告である。

そして実際に、この『甘い丘』という作品はその気概がないと乗り切れないような、やたらめたらに熱量の高い芝居だ。登場人物は揃いも揃って自己主張が強く、反目し合うし、ことあるごとに泣くわ喚くわ大騒ぎする。私が30歳の時に描いたものだが、まるで「もっと愛をちょうだい！愛を受けとめてちょうだい！」と叫んでいるかのようなこの戯曲に、稽古に入ってから私自身が疲労困憊の毎日だった。

「かまし」の甲斐あって、オーディションを経て集まった15名のキャストはそれぞれに個の強さを持ち供えた面々だった。いや、もしかするとこの時期さらに逞しくなっていった人もいただろう。なにせ稽古が始まったのは二度目の緊急事態宣言直前。集まるのさえ怖いと言うときにそれを乗り越えて来ただけでなく、開館時間短縮により稽古時間まで縮小されて、一度の短い稽古でかなりの集中力を用いたクリエイションを行わねばならなかった。仕事の有休を取ったり、休日を返上して自主稽古をしていた面々も多い。にもかかわらず彼らは一度も弱音ひとつ吐かないどころか、誰ひとり体調不良で休むこともなくやりきったのだから。

そんな根性のあるキャスト陣だったが、同時に明るく、涙もろく、情に深い面々でもあった。これもまた今作品を作る上で欠かせない要素として、オーディションからあらかじめ狙っていたことではあるが、私の期待を超える気の良い面々が集まった気もする。もしかすると豊橋という地がもたらす人柄なのかもしれない。

そうそう、豊橋ならではという点で欠かせないのは、元の戯曲には出てこない豊橋版『甘い丘』だけのオリジナルキャラクターまで誕生したということだ。

「生涯現役スリー」と名付けた60代のおじさま三人組で、それぞれに鶴・亀・猫となんとも目出度い名前がついた役。戯曲に年齢設定の合う役はなかったが、オーディションの時あまりに印象深く愛嬌があるおじさんたちだったので、役を作ってしまった。これは大成功だったと思う。彼らの存在が作品に厚みを持たせただけでなく、現場をより豊かに活気づけていた。女性陣にも60代のキャストが二人出演していたが、こちらは色気も実力も高いポテンシャルで年齢を感じさせない。平均年齢で言えば結構高めの座組だったが、これまで私が手がけてきたどの『甘い丘』よりもパワフルなチームだったように思う。

最初のプレ稽古で「心の鏡」というワークショップをしたとき、それぞれの人となりを見て私はこの舞台が成功する直感を抱いた。二人組になり、片方が心の中を打ち明け、もう片方が真似をするというワークで、始まって間もなくキャストたちから哀しみや喜びや怒り、様々な感情がほろほろとこぼれた。まだ出会って間もないのに稽古場のあちこちで啜り泣きが聞こえるのは端から見れば奇妙な光景だったかもしれないが、皆、自意識や気恥ずかしさを越えて互いの心に触れる瞬間に集中していた。こうしたエモーショナルな瞬間を、この後稽古で何度も体験することになった。そのたびに信頼関係も強まっていったように思う。

私はこの「市民と創造する演劇」という事業を、いわゆる「市民劇」という風には考えないようにしていた。一般の人がいっとき芝居を体験して心身を潤し、へたでもなんでも参加することに意義がある演劇というのも、それはそれで素晴らしい。だがこの『甘い丘』は、私の劇団のメンバーも参加していたが、誰が劇団員かわからないくらいのクオリティで作りたかった。だからこの座組を劇団だと思って臨んだ。一回きりの出逢いではなく、生涯の出逢いに。そうでなくては味わえない体験、見えない世界があると思ったからだ。

たった三回の本番だった。回を増すごとに力を増していくのが目に見えてわかった。

私はこのメンバーと作った『甘い丘』を、あと10回も20回もやりたいと思った。

日本中をこの芝居で旅したいと思った。

「市民劇だと侮るなかれ」

出演 **酒井晴江**［KAKUTA］

『甘い丘』に参加が決まった時、桑原裕子が市民劇で終わらせないだろうという事は想像できたし、KAKUTAの本公演の稽古のように、もしかしたらそれ以上に厳しい稽古になるだろうと覚悟した。

KAKUTAで公演する時の稽古は14時～20時とガッツリ長時間集中してやるのだが、今回は市民参加ということで、平日は夕方から。桑原の脚本の大人数でポンポンと飛び交う会話劇、手数の多い演出はプロの俳優でも苦労するのだ。限られた時間の中で自分も含めどこまでクオリティを上げられるのか不安がなかったといえば嘘になる。しかも稽古中に緊急事態宣言が発令され、公演そのものが出来るのかという不安もよぎる。稽古時間もさらに短くなり、いつもなら飲み会でコミュニケーションが取れるがそれが出来ないのももどかしい。

稽古に入ってそんな不安はすぐ打ち消された。オーディションで選ばれたキャストは、演劇に対する情熱を持ち合わせている事はもちろん、俳優としても人間的にも魅力的だったからだ。自分も一俳優として悩んだりもがいたりしながらも真摯に作品に取り組もう、この作品に関わる全ての人にプロアマ関係なく向き合おうと思った。

稽古時間が足りないところは自主稽古で補い、ダメ出しの時間が足りない時には稽古後にダメ出しがラジオ形式で送られてくる。市民劇だからコロナ禍だからといった妥協がない。

キャストだけでなく、スタッフとして参加してくれた市民の方々も作品を押し上げてくれていた。個性的で魅力的でパワフルなキャスト。頼りになるスタッフ。困難な状況の中、本番に向けて調整してくれる劇場。キャスト、スタッフ、劇場が三位一体となって本番を迎えることが出来た。

本番が終わって東京に戻る頃には体力的にも精神的にもヘトヘトでHPは2くらいしか残っていなかったが、私にとってかけがえのない経験になった。『甘い丘』で一緒に過ごした座組みは家族のように愛おしいし、豊橋はふるさとのように思える。

次にプラットに来た時には、ただいまと言おう。

「これぞ演劇。これぞ生物。」

演出補 **森崎健康**［KAKUTA］

『甘い丘』には演出補として参加させてもらい、その中でも幾度か稽古中に代役として入る機会もあり、改めて「演劇」というものに触れられたような気がします。

オーディションで選ばれた皆の魅力は出会った時から爆発していました。嫉妬すら覚えるほど、素敵な面々。何とも絶妙で素晴らしいバランスの座組。ひたむきで向上心があり、演劇を楽しむ姿勢。素敵な『甘い丘』が出来上がるぞ。本読みの段階で確信しました。

その思いとは裏腹に、常にマスクを着用し稽古時間が短縮され、お互いディスタンスを取り、シーンに出演しないキャストは稽古場にすら入れない厳戒態勢で稽古は進んでいきました。

人との交わり、コミュニケーションが何よりも大事な今作にとって、何とも創作が困難な状況が続きました。しかし、気運を高めるのはやはり人。皆のモチベーションは下がることなかった。市民の方々は慣れない環境に戸惑いもあり、計り知れないストレスがあったと思います。

それでも現場の空気が澱む事なく、むしろ、いつでも心地よい風を吹かせてくれ、芝居に打ち込む皆を見て胸が熱くなった事を覚えています。文字通り走り回って『甘い丘』上演の為に尽力してくださったPLATの制作部。より良い環境で稽古出来る様に朝から夜まで準備していた演出部。

全セクションの方々の前向きなエネルギーが相乗効果で作品に乗っかるのだと今作品ほど思うことはなかったかもしれません。どうか『甘い丘』が上演出来ますように。沢山の人達に『甘い丘』を観て欲しい。この人たちを観て欲しい。おこがましくもそんな事を思いながら、稽古を見守る日々でした。

『甘い丘』が終わって早2ヶ月。幻のような公演でした。マスクを付けず、躍動する役者の顔や声。舞台上に生まれる空気や匂い。お客様の盛大な拍手。「市民と想像する演劇」に関わられせて頂き、皆と出会えた事感謝致します。

個人的に再演を希望します。その時は桑原さんにもう1人新しい役を書いて頂いて、僕も出演者に名を連ねたい。

「劇団甘い丘」のメンバーと何でもない話をあーだこーだ話したい。そんな日が早く来ますように。

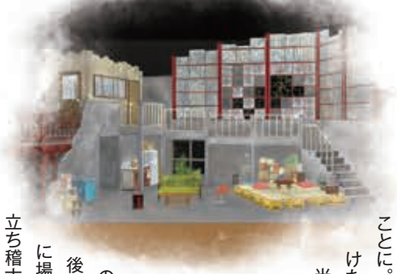
あらすじ

うだるほど暑い夏のある日、
かの子は就職面接のため丘の上に建つ
サンダル工場を訪れる。
女性工員が八割を占めるというその工場は
悪臭が立ちこめる過酷な現場。
働くのはひと癖ある訳ありの者たちばかり。
ずっと専業主婦で何不自由なく生きてきたかの子は
カルチャーショックを受けるが、
それでも住み込みで働くことを選ぶ。
なぜなら彼女にはもう、行き場がないのだ。
愛を逃した女。愛を憎む女。愛も枯れた女。
そしてまだ愛を乞う女たちの、
渇望と再生の物語。

相関図

◆出演者紹介

さわら
椹市朗
置田浩紳



第一次稽古

◆1月9日(土)―1月17日(日)

7回目となる「市民と創造する演劇」は、第52回岸田戯曲賞の最終候補作を市民出演者と上演するにあたり、脚本を一部改稿し、追加オーディションを経て17名の出演者が第一次稽古で顔を合わせた。しかし、稽古開始目前の1月7日に首都圏で、また愛知県も13日に緊急事態宣言が発令された。それを受け、急遽予定していた稽古の日程を減らし、終了時間を前倒すことに。コロナ禍での影響を多大に受けた波乱のスタートとなった。前半の9~11日は感染症対策に配慮しながらの読み稽古を行った。シーンごとに登場人物それぞれがどんな役割でどんな目的をもっているか、それをどうセリフに乗せて表現するか、桑原さんより熱のこもった演出が行われた。後半の15~17日は舞台図どおりに場ミリをしたアートスペースで立ち稽古を行った。今作では二階建てのサンダル工場の事務所を建て込む。セットを想定しながら2日間で全シーンの出ハケ場所と立ち位置を確認した。限られた時間の中で、出演者たちも集中した濃密な稽古となった。

第二次稽古 1 週目

◆2月1日(月)―2月7日(日)

第二次稽古は稽古場となる創造活動室Aに、二階建てのセットのベースが組まれた状態でスタートした。セット内も袖も階段が多いつくりに苦戦しながら、出演者は実際の舞台に近い状態でセリフに合わせた立ち位置を確認していく。稽古は第1場にじっくりと時間を使い、冒頭の登場人物たちを印象付けるよう丁寧に進められた。また舞台監督の安田美知子さんと演出部も第二次稽古より合流し、小道具も実際に使うものが徐々に揃えられていった。愛知県の緊急事態宣言が2月いっぱい延長し、劇場は20時閉館となっていた。平日の稽古は18時~21時の予定から、16時30分~19時30分に前倒すことに。平日仕事後に稽古に参加する市民出演者は、稽古の時間を十分に取ることができずに歯がゆい思いをしていた。

第二次稽古 2 週目

◆2月9日(火)―2月14日(日)

稽古は物語の中盤となる第3場・第4場に進む。大人数でのセリフの応酬のテンポや喧嘩の段取りを危険のないよう丁寧に確認しながらシーンを作っていく。季節が進むことで変化する登場人物たちの関係性や成長を、演出と出演者ですり合わせながら稽古が進められた。また市民スタッフの活動も本格的に始動。今年は感染症予防対策のために稽古の見学や大人数集まっての作業ができないなか、演出部・衣装部・広報部と希望部署を分け、少人数で作業を振り分けて進められた。

自宅からも参加できるよう、舞台に貼られる標語を募集、また稽古時間外に稽古場ツアーを複数回に分けて行われた。14日には衣装パレードを実施。シーンごとに季節が移り変わるため、全シーンで衣装が変わる膨大な着数のスタイリングには、市民から集めた衣装も活用した。

第二次稽古 3 週目

◆2月16日(火)―2月21日(日)

ラストシーンまでの稽古をひと通り終え、自分やお互いの役に思っていることの話し合いと冒頭からの振り返り稽古を経て、21日に初の通し稽古が行われた。1年を経て登場人物たちがどう成長し、どう他の人物に影響を与えたか、物語の全体像が見えてきて出演者たちも課題が見えてきた。またこの頃よりPLATのインスタグラムアカウントを開設。市民スタッフの広報部が日替わりで稽古見学をし、稽古場のレポートや感染症対策など切り口を工夫した投稿がされた。

第二次稽古 4 週目

◆2月23日(火)―2月28日(日)

24日にアートスペースでの舞台仕込みが行われ、舞台美術の田中敏恵さんプランによるサンダル工場のセットが立ち上がった。翌日より舞台を使用した稽古が始まり、客席からの見え方や裏導線も考慮しながら稽古が進められた。市民スタッフは、衣装の汚し加工や管理、楽屋の感染症予防の衝立製作、稽古後の舞台消毒、SNSでの出演者紹介、舞台上で流れるテレビ映像操作のための稽古参加と、本番に向け幅広い業務を担った。稽古に参加できず顔を合わせる機会がなかった演出の桑原さんやKAKUTA劇団員と市民スタッフの交流会も設けられ、作品のことだけでなく、演劇に携わるようになった経緯など貴重な話を聞ける時間となった。週末には本番同様の消え物や血糊を使って衣装付き通しを行い、公演が間近に近づいている緊張感が満ちてきた。

第二次稽古 5 週目

◆3月2日(火)―3月7日(日)

ついに照明も入り本番同様の状態での「場当たり」がスタート。初めて出演者全員がマスクを外し、自分の発声や見える表情の違いに戸惑いもみられた。市民スタッフは本番での舞台裏の管理、当日受付スタッフ、片付けなど本番終了後まで多岐にわたる業務を分担してこなした。感染症予防も油断できない中、最後まで作品のブラッシュアップが続けられた。2月末に緊急事態宣言が解除され、PLATの閉館時間も21時に延長したため、6日夜の上演後にアフタートークを実施することを決定。入場数定員の50%制限に伴い、チケットは全公演完売で本番を迎えた。

Schedule スケジュール 2020-21

2020年

2月8日[土] ―― **市民出演者募集開始**

4月10日[金] ―― **応募締切・第一次選考** 出演希望者73名の応募があり、第一次選考では書類審査が行われた。

4月16日[木] ―― **オーディションの延期決定**
5月16日・17日に予定されていた第二次・第三次選考は、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い緊急事態宣言が発令され、劇場が臨時休館に。オーディションの開催を延期した。

9月18日[金] 19日[土] ―― **第二次選考**
20日[日] ―― **第三次選考**
第二次選考では自己紹介や詩の朗読、脚本の一部を読むワークショップオーディションが行われた。第三次選考では演出を受けながらグループごとに作品内のワンシーンを作り上げた。このワークショップオーディションを通して、出演者13名の出演が決定。オーディションで決定しなかった2役はのちに追加オーディションを行うことが決まった。

11月21日[土] ―― **発声ワークショップ**
28日[土] ―― **追加オーディション**
豊橋版『甘い丘』追加キャストを含む全17名の出演者が決定した。

12月4日[金]~6日[日] ―― **出演者プレワークショップ**
12月10日[木] ―― **チラシ・ポスター完成**
13日[日] ―― **身体ワークショップ**
15日[火] ―― **市民スタッフ募集開始**
20日[日] ―― **演劇ワークショップ**
11月の発声ワークショップでは、ボイストレーナーの新田恵さんにより、声帯についてのレクチャーや、発声トレーニングを実施。出演者プレワークショップでは作・演出の桑原裕子さんによる、稽古に向けた信頼関係や共通言語を構築するためのグループワークや、脚本の読み合わせが行われた。身体ワークショップでは下司尚美さんによるフラットな身体の作り方や怪我をしないためのストレッチについてのレクチャー。演劇ワークショップではKAKUTA団長を務める成清正紀さんを講師に招き、桑原さんの演出で重要な「レセプション」についてのレクチャーがあった。

2021年

1月9日[土] ―― **第一次稽古**
30日[土] ―― **チケット発売開始**
2月1日[月] ―― **第二次稽古開始**
7日[日] ―― **市民スタッフ オンライン顔合わせ**
2月24日[水]~3月4日[木] ―― **仕込み・劇場リハーサル**
3月5日[金] ―― **ゲネプロ**

3月6日[土] ―― 【本番】 ◆13:00開演・入場者93名／17:30開演・入場者94名
7日[日] ―― ◆13:00開演・入場者95名 ◉総入場者数282名

6月6日[日] ―― **本番映像上映会**

市民と創造する演劇

甘い丘

市民スタッフ紹介

「市民と創造する演劇」に必要不可欠な存在の市民スタッフ。今作では21名の市民スタッフがこの作品を支えました。新型コロナウイルスの感染予防対策により例年通りの活動が難しい中で、劇場スタッフや現場で活躍するプロスタッフと共にそれぞれの得意分野を活かしながら様々な仕事を担当しました。

赤石さくら　渥美昌史　石渡愛乃　市野ゆみ　伊藤大晃　今栄敬子　岩倉郁子

岡田野乃佳　神谷恵子　神山莉沙　佐々木宏子　佐藤葵　鈴木萌々　祖父江和之

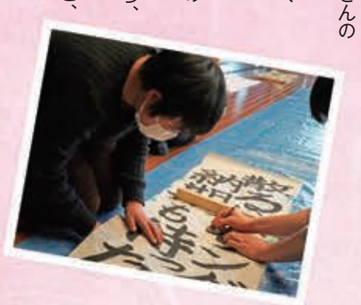
竹下ちえ子　中村剛大　深谷歩香　藤田仁美　藤田理子　古田久子　本多るみ子

スタッフワーク

演出部

舞台美術・大道具・小道具

舞台監督の安田美知子さんのもと、舞台上で使用するサンダル工場のロゴ作成、標語づくりや、選ばれた標語を垂れ幕に書く作業などの小道具作成を行った。舞台美術を作る作業から、市民より集められた大量の小道具の管理など、作業は多岐にわたった。



音響操作

音響・島貫聡さんの指導のもと、音響・映像のオペレーションを行った。ビデオテープを入れて再生するシーンは市民スタッフのキューにより再生されたもの。

衣装部

衣装・富永美夏さんに教わりながら、衣装の汚し作業、本番中の早着替えのサポートを行った。市民から集めた衣装のリストアップ・洗濯やアイロンがけなどの衣装管理も担当した。

広報部

SNSの発信

ミーティングを重ね、Twitter・Instagramでの広報を担当。稽古場での感染予防対策を発信したり、公演までのカウントダウンを行うなど趣向を凝らした。

記録映像

稽古場の様子を撮影したり、テクニカルスタッフのインタビュー動画を撮影・編集し広報動画として宣伝を行った。

消毒部

舞台上・舞台裏の消毒

稽古と本番後の舞台上、舞台裏の消毒を行う消毒班は、小道具の材質や種類によって消毒方法や薬剤を変える徹底ぶり。感染リスクを下げるため、例年ではなかった作業を市民スタッフが担った。

感染予防グッズの作成

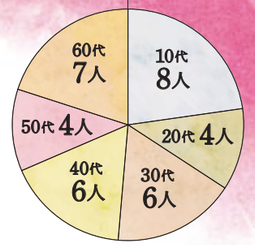
楽屋内での感染を防ぐため、飛沫防止用の机用衝立を作成した。衝立のデザインも市民スタッフが担当。作業分担や装飾など工夫を凝らした。

ホワイエ・場内スタッフ

小屋入り中、お客様に配布するパンフレット束を作成。本番入場時に検温や手指の消毒など、安心安全に観劇できるよう会場案内を行った。

出演者・スタッフアンケート

◆出演者14名／スタッフ21名



年代割合

1 7月のオーディションワークショップについて

- とても緊張した。
- 濃密で楽しかったです。
- 緊張はしましたが、ワークショップ形式で進めてくださったのでとても楽しく出来ました。いろんな地域から来られている方も多くてびっくりしました。
- 他の人の表現を見るのもやるのも勉強になったし、面白かったです。
- 募集要項の桑原さんのコメントを読み、かなりの覚悟がいると思っていたが、確かにハードルが高かった。例年はワークショップに似た雰囲気だったが、今回は本当にオーディション。緊張感が違った。

集計結果 1

ワークショップオーディション		とても満足	満足	どちらともいえない	不満	とても不満
キャスト	日時	6	8	0	0	0

2 11月～12月のワークショップについて

- 意図&狙いが一貫していて大変に良かったが、回数が少なく理解が難しかった。
- 本名を知る前に愛称で呼びあうことやゲーム感覚の内容が、出演者の方達といち早く打ち解けることが出来て良かったと思います。
- 面識のないメンバーが集まって芝居を作るための、お互いを知るというところをしっかりやっていただけたのは非常によかったと思います。
- 演劇ワークショップ、演技におけるレセプション・リアクション・アクションを認知させられた。ボイストレーニング、身体の構造からの理論的なトレーニングに感動と驚きの連続だった。胸を回す、前後、左右など、現在も利用している。

集計結果 2

事前・出演者ワークショップ		とても満足	満足	どちらともいえない	不満	とても不満
キャスト	日時	5	8	1	0	0
	回数・長さ	6	5	3	0	0
	内容	8	5	1	0	0

3 第一次稽古について

- 本読みがすごく丁寧だった
- 早い段階で実寸の中で動けたことは良かったと思います。桑原さんの言葉もわかりやすく、安心しましたし、私は事前のワークショップを受けてなかった分、皆との関わりを持てるか心配してましたが、プラットの企画に参加し続けてる方々にフォローしていただいてました。
- 皆でいいものをつくろう！今日はここまでいくぞ！という目標に対して皆が全力で、一つになっていく感じがあり、より二次稽古や本番が楽しみになる稽古でした。
- 計画よりも少ない日数となりましたが、台本を持っての荒立ち稽古、シーンの居場所を確かめる稽古を、2月の本格的な立ち稽古前に、ひと通りあたれたのが、かなり良かったと思っています。時間が限られていたので、とても有効的だったと思っています。

集計結果 3

第一次稽古		とても満足	満足	どちらともいえない	不満	とても不満
キャスト	日時	6	7	1	0	0
	回数・長さ	4	9	1	0	0
	内容	9	4	1	0	0

4 第二次稽古について

- 時間が少なかったので不安もいっぱいでした自分もなかなかキャラが追い付かないし難しかったです。動画撮影で自分を振り返ることが出来たので助かりました。
- この状況でほぼ計画通りに進捗させるスタッフメンバー、キャストとも本当に素晴らしいなと思いました。自分が急遽稽古に行けなくなった時のフォロー（稽古動画や内容の伝達、自主練）もしっかりしていたし、皆で引っ張ってくれる感じでした。また、桑原さんの振り返りがとてもわかりやすい。ココロにすとんと落ちる言葉をくれるので、頑張る気持ちになりました。生で色んな稽古が見られなかったのは残念でした。
- 体調管理に気を遣う日々でした。稽古スケジュールの計画性が素晴らしく、体調管理が上手くいった。
- 稽古を見学出来なかったのは残念だったけど、オンラインで配信してくれたから時間のある時は見られたし、役者の様子から充実したものだったんだろうなと思った。オンライン配信があると後から見返せるから、役者だけじゃなくて常に見ていられないスタッフにとってもコロナ関係なく有難い。
- 画面越しに見聞きする稽古の風景は、小道具作製しながらでも情報が入ってくるのでいいと思った。

集計結果 4

第二次稽古		とても満足	満足	どちらともいえない	不満	とても不満
キャスト	日時	5	9	0	0	0
スタッフ	日時	3	7	9	0	0
キャスト	長さ・回数	3	6	4	1	0
スタッフ	長さ・回数	1	8	10	0	0
キャスト	内容	11	2	1	0	0
スタッフ	内容	3	5	11	0	0

※スタッフ未回答／3名

5-1 公演を終えて

- やりきった満足感でいっぱいですが、もっと時間が有れば更に良くなったと思います。また、お誘いした方々が全員愉しんでくれて最高の感想を伝えてくれた事が嬉しかった。
- コロナ禍でやり切れたことはとてもよかった。公演回数が増えると嬉しい。
- 最後まで良い作品にしようと追求できたことが良かった。本番の回数がもう一回でも多いと…。本当に（全国）ツアーができたら、おもしろかっただろうなと思いました。それだけ真面目で熱心な人たちが集まってて、やる度に良くなっていってたから。
- 市民とつくる演劇の中では、日本トップクラスの芝居だったと思ってます。（中略）自分とかけ離れた人物を演じ、俳優として大きな自信となりました。市民参加型のお芝居に2度目の出演でしたが、プラットが大好きな場所になりましたし、自分の故郷から通える場所に、この劇場があることを、心から嬉しく思います。
- 本当にこんな素晴らしい作品、桑原さんやスタッフさん、役者のメンバーと一緒にこの作品を作ることが出来たこと、すごく貴重な体験が出来て感謝しかないです。あんな素敵な舞台セットでやれたことも感謝です。本当にこの作品に出られて良かったです。
- 桑原さんの芝居作りに参加できたことは自分に取ってこの上なく貴重な体験になりました。本当に嬉しかったです。
- 公演を行うためにどうしていくか、前向きに考える姿勢で事に当たる雰囲気が居心地よかった。
- コロナ禍の中で、とにかく上演できて、良かったです。普通の状況で、もっとたくさんの人に観てほしかった。

集計結果 5-1

公演を終えて		とても満足	満足	どちらともいえない	不満	とても不満
キャスト	満足度	11	2	1	0	0
スタッフ	満足度	10	10	1	0	0

5-2 この企画に参加する前と変わったと感じることはありますか？

「ある」を選んだ方は、その内容・理由をお答えください。

- わざわざ東京で芝居をしてなくてもいいのではないかと思った。
- 桑原さんの演出力の凄さに驚いた日々でした。本当に無駄が無くて、役に食い付いていく事を学びました。

集計結果 5-2

変わったと感じること		ある	ない
キャスト	変化	13	1
スタッフ	変化	19	2

5-3 「市民と創造する演劇」の企画について（感想・要望）

- 普段、演劇を観ないだけでなく、プラットにさえ行かない方々が、また行きたいとの声を聞くと、この様な企画は裾野を広げる有効なアイテムだと思います。また、リーズナブルな点もとても良いと思います。
- 自分は今回のように台本に書かれた台詞をもっともっとしっかり理解し、表現して行く事の大切さを考えなくてはと思うようになりました。
- 自分の意識を高く保つ、周りにも影響を与えるということを再認識。
- 高校生と創る演劇の時も思ったけれど、あの時以上にいろんな大人と関わって更に視野が広くなったなと思う。試験が被っていたけど無理にでも参加して良かった。
- 大学の志望学部に影響した。裏方的な仕事もかっこいいと思ったから。
- 舞台音響への興味が強くなった。
- 豊橋にはあまり演劇に興味関心のある人がいないのではと思っていたが、スタッフとして参加してみて、演劇が好きな人は思ったより豊橋にもいるのか！と知りました。

集計結果 5-3

今後の参加について		参加したい	知人に勧めたい	参加できない	参加しないし勧めない
キャスト	今後	12	2	0	0
スタッフ	今後	19	2	0	0

- 毎年違う演出家さんを招いていただくことで、いろんな演劇や作品づくりの方法に触れられて面白いなと感じています。
- この企画を通して、プラットの周りに芝居が好きな人たちが増えているように思います。それは市民劇の力が大きいと思っています。足を運びたくなる場所、用がなくても気軽にいける場所、頑張った自分を思い出せる場所として、穂の国とよはし芸術劇場があることが、嬉しいですし、多くの人にとってそんな場所であるために、スタッフさんは大変ですが、続いてほしい企画です。
- ミュージカルをやりたい。
- 高齢者が気軽に参加できること、そして幅広い年齢層の交流ができることに感謝している。
- 演劇に関わることが出来ることと、色んな世代の方や違う経験、仕事をしている方々に会えて面白いです！
- 芝居の裏側を見ることができて面白かった。あの舞台の仕込みが見たかったです。
- 高校生の企画は年齢制限もあるので毎年メンバーが変わるが、市民の方では毎年参加を続けている人もいて、良くも悪くもメンバーがあまり変わらないのかなという印象を持った。
- 舞台を創るにあたって、自分も創る側で活動もしていますが、学べる場所がありません。市民と創造する演劇の企画ですごく学ばせていただいてます。今後このような状況の中で舞台

創作活動をしていくにあたりコロナ対策や意識もとても勉強になりました。

5-4 今後もこの企画を継続した方が良いと思いますか？

●オーディションを受けに来ている人がとても多かったので、演劇に出たい人がとても多いと感じた。そういった人たちにとっても演劇ができる、やってみる環境があるのはとてもありがたい。スタッフとして参加できるのもとてもいい。

●良い作品を作って観劇して貰い、観劇した人達が舞台に立ちたいと思う事で豊橋の演劇環境が上向いて行くのでは。

●キャストとして、役者に集中できる環境を用意してくださっているからこそ、今まで舞台に立つ経験がなかった方や、少し忙しい方でも参加できると感じています。そういった方々が参加できる機会であるといいなと感じます。また、キャストだけでなくスタッフの方などと繋がり、新たなネットワークが生まれる場があり続けるといいなと思います。

●それぞれが好きな、持てるものを持って参加できる企画はとても良いですし、桑原さんのように大活躍されてるプロの方と一緒にものづくり出来るのはとても貴重な体験です。今後も続けてほしいです。

●地方でも真剣に、ハイレベルな芝居が創れるということを経験できる機会があることは貴重です。ぜひ続けていただきたいです。

●「継続したほうがいい」と思うが、みんな気軽に参加しましょうというレベルは終わっていると思う。しかし作品のレベルを高めると、オーディションは狭き門になる。その後の舵取りが気になります。

●こんな経験が出来る機会は貴重だし、演劇に興味があってもなくても参加を勧めたいくらい凄い企画だと思っているのでぜひ継続して欲しい。

●演劇をやっていたけど、もう一度やりたいなと思った方や、興味があったけれど演劇に関わることがなかった方に出来る場になって欲しいです。私は演劇には興味があったけれど機会がなく、今回調べて応募しました。

●一般の市民が、キャストやスタッフとして、プラットの公演に参加できるチャンスなので、是非継続してほしい。

●地域の方と大きなものを一緒に作る経験はなかなか出来ない。

●プロの仕事を見られるし、演劇好きな市民と繋がれる。

●キャスト側であれスタッフ側であれ、参加する事で其処で何かを学べて、その経験はその後の生活を楽しくしている気がします。

集計結果 5-4

今後もこの企画を		継続した方が良い	どちらともいえない	継続しない方が良い
キャスト	継続	14	0	0
スタッフ	継続	21	0	0

6 今後プラットに対する期待・要望

●演劇を身近なものにしようとする取り組みは他所であったとしても、ここまでの規模のものはないと思います。わたしは参加して楽しかったから、今後ともこの道を進んでいって欲しいです。

●劇場所属の俳優が居て、プラット主催の公演が行われることを、夢見ます。

●市民劇のようなユニット的な活動も良いですが、地元の劇団の体制維持のためにも、ご協力いただければと思います。

●これからも市民にとって見たことのないものを見せてほしいです。また、市民がやったことのないこともできる場であってほしいです。

●今回ｚｏｏｍ会議と言う新しいコミュニケーション方法が取れました。これからも時代や状況に合った行動を模索して取り入れて欲しいと思います。

●実現が難しいとは思いますが、「市民と創造する演劇」桑原さん演出公演第二弾を期待します。

7 その他、意見・メッセージ

●豊橋が私には第二のふるさととなったので、また遊びに行きますし、プラットにも顔を出そうと思います。これからもよろしくお願いいたします。今回は、本当にありがとうございました。

●いつか市民と創造するミュージカルが実現することを願っています。

●市民スタッフという初めての体験で、とても勉強になりました。特に、劇場制作のお二人の目まぐるしい気配りと働き、動き、そのエネルギーに感服です。ありがとうございました。

8 市民スタッフの仕事について

●コロナ禍中、担当者さまのご尽力で調整していただき参加させてもらえたことが大変ありがたかったです。市民スタッフの皆様の積極的かつ優しい参加姿勢にも感動しました。また、様々な仕事があって、技術のない人間もお手伝いできる機会があり、良かったです。

●劇中で使われるアルバム作りは、ほんとうに自分のアルバムを作っているみたいで、はまりました。

●新型コロナ禍中での人数制限などの事情を納得での参加でした。例年のように一緒に作業できないのは物足りなかったのは正直な感想です。そんななか、スローガン募集参加で少しは役に立てたこと、桑原さんたちと市民スタッフとの時間を作ってくだった配慮がとても嬉しかったです。また稽古動画を視聴できたことで、演者と制作スタッフの方々の意気込みを感じ、市民スタッフとして作品を支えたいモチベーションを上げられたのは非常にありがたかったです。

集計結果 8

市民スタッフの仕事		とても満足	満足	どちらともいえない	不満	とても不満
スタッフ	内容	7	12	2	0	0

新聞記事 Newspaper article

東愛知新聞　2021年（令和3年）3月9日（火曜日）

プロには出せない〝深み〟

市民ら熱演、大きな拍手

豊橋プラット「甘い丘」

オーディションで選ばれた住民が出演する、市民と創造する演劇「甘い丘」の公演が6～7日、豊の国とよはし芸術劇場「プラット」であった。プロ顔負けの演技に観客からは大きな拍手が贈られた。【竹下貴信】

プラットが開館した翌年の2014年から、劇場を身近に感じてもらおうと毎年開いている企画。今回は17人がオーディションを受け、東三河を中心に20～60代の大学生、公務員、主婦、会社員ら14人がプロの劇団員3人とともに出演した。

「甘い丘」は、プラットの芸術文化アドバイザーを務める桑原裕子さんが作・演出を担当。自身が主宰する劇団「KAKUTA」で07年と09年に上演し、今回は再演となる。サンダルと瓶の中で繰り広げられる人間模様を描いた作品で、愛を惜む女性を巡った、愛を惜む女性らと、その周辺の男たちの再生の物語だ。オーディションの結果を受け、「生霊現役スリー」と名付けた3人組のおじさん役を新たに追加させた。

出演者たちは、言い争い、ケンカの激しいシーンから、苦しい胸の内を明かすシリアスなシーンまで、さまざまな演技を見せた。

桑原さんは「長年の仕事や主婦の経験がある市民の皆さんの演技には、プロには出せない深みがある。それを発現できたのでは」と話す。出演者たちは、「コロナ禍の中、本番を迎えられたこと、誰も欠けることなく最後までできたこと、お客さんを迎えられたこと、すべてが感無量です。桑原さんの演出に励られたことも本当にうれしかった」と話していた。

素晴らしい演技を見せるオーディションで選ばれた市民らプラットで（提供、撮影・伊藤康雄）

※掲載の記事・写真は新聞社の許諾を得て掲載しています